

スポーツビジネスとしての日本プロバスケットボールに関する研究

～アメリカ NBA のようなメジャーリーグになるには～

1140473 平本 真輝

高知工科大学 マネジメント学部

1. 概要

現在、日本のバスケットボール界には実業団とプロリーグの2つのリーグが存在している。元々その2つのリーグは1つのリーグだったのだが、いつまでもプロリーグ化しないことにしびれをきらせたある1つのチームが協会から脱退し、bjリーグというプロリーグを設立した。しかし、協会から脱退したため、bjリーグのほとんどの選手は国際大会に出場することが出来ないため、日本代表の選手は日本の選手の半分から選ばれた選手なので、選手層は半分の力になってしまう。それだけが日本が国際試合で勝てない理由ではないが、分散させているなら1つになった方が強いに決まっている。さらに、リーグを1つにすることで日本のバスケットボール界を盛り上げていこうじゃないか、という提案でもある。

全選手で総ドラフトを行い、ルーキードラフトは新たな人材発掘のため、高校卒業、大学生、社会人問わず、実力があれば“来る者拒まず”の姿勢でいくこととする。などのルールを設け、地域とも密着に関わり、私立の学校のバスケット部教育にも力を入れられるようなビジネスモデルを目指す新リーグを構想する。そして、今後は2020年の東京オリンピック出場を目指し、日本のバスケットボール界全体の活性化を図り、“バスケットブーム”を巻き起こす。

1. 背景

私は、中高バスケット部でバスケットを始めたときから観戦が好きで約9年間アメリカのプロバスケットボールリーグ NBA を観てきた。2006年に日本で開催された世界選手権を機に日本のプロ選手について少し知るようになった。

大学3年の頃にテーマ設定をする際、NBAについて研究しようと考えていたが、日本の高校生のインターハイの試合やプロの決勝を見たときに外国人選手が目立っているのを目の当たりにし、なぜ日本の選手は勝てないのか、と疑問を持ったことがきっかけである。

野球やサッカーは世界に通用するレベルであり、国際試合は国中が熱狂し、また地上波で試合中継が放送されているにも関わらず、なぜバスケットだけが予選敗退、リーグがマイナー、という現状なのか、と感じるようになりこのテーマを設定した。この研究によって日本のプロリーグが、プロ野球やJリーグのようなメジャーリーグになるビジネスモデルを提案する。

2. 目的

日本のプロがメジャーでないことにはいくつか原因が挙げられる。その中でも企業リーグのJBL、プロリーグのbjリーグ、と2つのリーグが存在し、複雑化していることが重要課題であると私は考える。

本研究では、なぜ日本バスケットでは2つのリーグが存在しているのか、またなぜ2つ存在することが問題であるのかを明らかにし、これらの新たな1つのリーグ統合の可能性を明らかにすることを目的とする。

3. 骨子

序

1章 日本プロバスケットボールリーグの現状

- (1) 二つのリーグの存在、JBL と bj リーグ
- (2) JBL
- (3) bj リーグ
- (4) リーグ統合問題

2章 企業とチーム

- (1) 企業チームとは
- (2) 企業との関係

3章 成功事例研究

- (1) NBA : L.A レイカーズ
- (2) bj リーグ : 大阪エヴェッサ
- (3) JBL : 初の NBA プレイヤー田臥勇太

4章 bj リーグと NBA

- (1) bjリーグが出来るまで
- (2) 地域密着プロスポーツ
- (3) NBAの模倣

5章 新たな日本プロリーグの設立

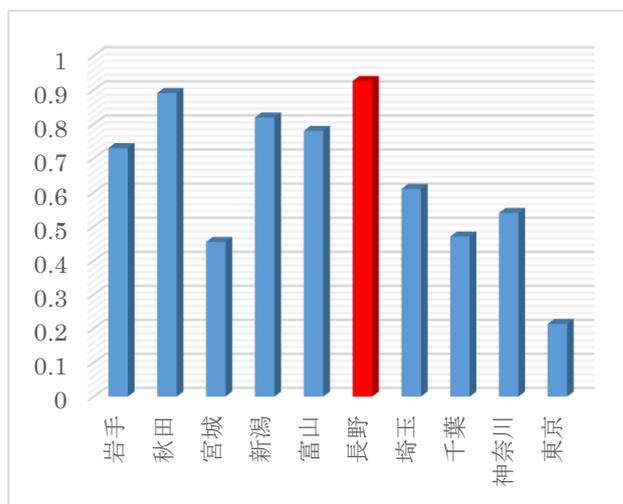
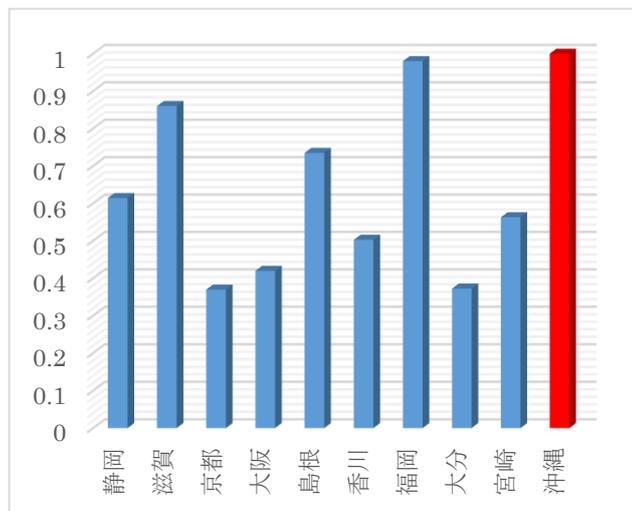
- (1) なぜbjとJBLは統合出来なかったのか
- (2) bjとJBLの課題
- (3) それぞれの因果関係
- (4) 2つのリーグ→新しい1つのリーグへ

結論

4. 日本プロバスケットボールリーグの現状

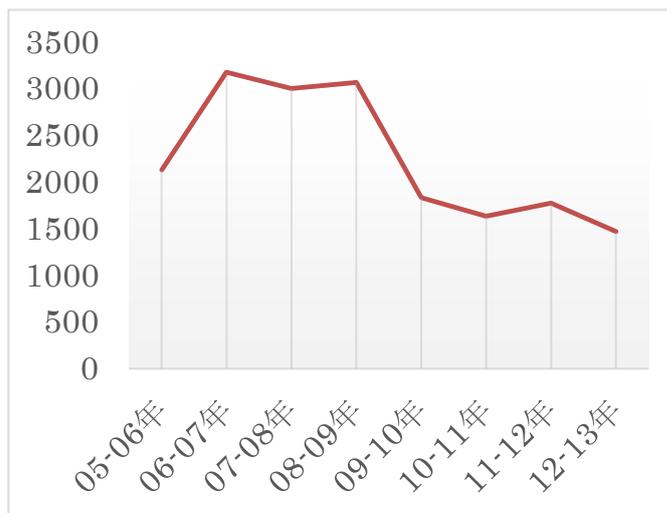
現在、日本のバスケットボール界には2つのリーグが存在している。1つ目はJBL。はじめは1996年に発足した社会人トップリーグ「バスケットボール日本リーグ機構」が発祥で、2007年プロリーグ化を前提に新リーグ「日本プロバスケットボールリーグ」へ移行。そして昨年2013年7月、それまで企業スポーツだったリーグを「NBL」と新たに名前を変え、新トップリーグとして発足した。

2つ目はbjリーグ。2005年に完全プロリーグとして発足した。このように日本にはバスケットボールのトップリーグが2つ存在しており、この2つのリーグは競技のルールやリーグの運営方針、1シーズンあたりの総試合数などそれぞれが決めたスタイルで運営している。そのため、同じバスケットボールという競技であるのにも関わらず細かな違いではあるが、ルールに違うがために観客側としては非常にわかりづらく複雑なのが残念な現状だ。



このグラフは東西ごとにおけるbjリーグの2012-13シーズンの集客率のグラフである。これらのグラフを見ると、観客で埋め尽くされているのは沖縄だけと言っても過言ではない。

bjリーグ開幕当初から3連覇を遂げた大阪エヴェッサでさえ、人気は低迷しており以下のグラフの状態だ。



一方、JBLは昨年2013年7月、正式にプロリーグ化を図り、リーグ名をNBLと改め、bjリーグからも1チームが参加し、リーグ統合に動きを見せている。

では、なぜ今までリーグが統合せず2つのリーグが別々のリーグ戦を行っていたのか。そもそもリーグが2つ存在するようになったのは最近の出来事で、元々は1つのリーグだったのだ。トップリーグだったJBLがプロ化を渋っていたことにしびれを切らせたチームがリーグから脱退し新たに完全プロとしてbjリーグを設立したのがまだ9年前のことである。その簡単な経緯としてbjリーグコミッショナー河内敏

光氏の動きを記した記事がある。

JBL（日本バスケットボールリーグ機構）に属するとそのチームがホームで試合をする場合、毎試合の開催権として分担金を JBL に支払う。

（※スーパーリーグの場合、100 万円から 200 万円。ほかに体育館の使用料、設備費、審判料など試合のための費用をチームが負担するのだが、開催権はあっても興行権は持てない。

スーパーリーグの場合、分担金を加えるとホームでは毎試合約 300 万円、遠征では約 200 万円の経費が必要になる。）一方チームが得る収入は地場スポンサーや後援会のカンパぐらい。

興行権を持たずに入場料収入がなくては毎試合、経費を垂れ流しているようなものだ。

それでも、大企業にサポートされたチームなら問題はないのだろうが、

新潟アルビレックスのようなクラブチームは存続そのものにかかわる。

そこで河内は、興行権を持つ県の協会から興行権を買い取った。

会場に掲げる地元スポンサーの看板料という名目で、1 試合 30 万円を協会に払い、興行権を手にしたのだ。

河内「入場料収入は確保できたんだが……。うーん。スタンドは確かに埋め尽くされるようになった。

しかし、アウェイでは収入はない。売上は上がったが利益が出ない。これでプロといえるのだろうか……。

JBL の中にひとりプロチームがあるだけでは逆に飲み込まれてしまう。ダメだ！これでは！」

はじめは 1 つのリーグだったのだから統合するのは容易いことのはずだが、今までそれがなされず、なぜ今になって分裂してしまった 2 つのリーグが 1 つに戻ろうとしているのか。

5. 企業とチーム

JBL は「日立サンロッカーズ」や「トヨタ自動車アルパルク」といったようにチーム名に企業名が入ったチームで形成されている。文字通り、トヨタならトヨタ自動車が運営する

バスケットボールチームである。選手はⅡ種と呼ばれる全員社員の場合とⅠ種と呼ばれるプロ、セミプロ、学生など（主に社員以外の総称）で構成されている。企業とチームの関係は企業がスポンサーではなく企業の運動部という状態に近かったと言える。プロ化に至らなかったのは、企業からの支援が十分ではないことやチームのレベルアップに弊害が出るなどの課題を数多く抱えていたため。また、日本バスケットボール協会の役員の一部は、プロリーグ化に未だ反対している。

ではなぜ、今になってプロ化が進んだのか。企業側が完全に承認したというわけではない。企業チームが難色を示したため企業チームを維持しながらの参加を条件付で認めた。そのためプロになったチーム、興行権を自社で保持したままのチーム、外部に委託したチーム、JB0（日本バスケットボールオペレーションズ）という関連法人に委託したチームなどに分かれているのが現状である。これに bj リーグ側は反発しているため、初年度の bj リーグからの参加チームは 1 チームにとどまっている。しかし、企業側も資金不足という課題が解決しづらく、いずれは球団を手放し、いろいろな所から資金を集めるために、時代の流れとともにプロ化に向かっていく、と私は考える。それでもやはり、企業側と元 JBL のチーム、協会、bj リーグとの対立はまだ数年続くと考えて間違いない。

以下の図はプロ、企業それぞれのチームごとのメリット・デメリットを簡潔にまとめたものである。

	プロチーム	企業チーム
メリット	自チームの価値が高まれば（人気が上がると、集客が増える、など）、多くの運営資金を得ることができる。	決められた予算で運営するため、安定的な運営ができる。
	そのため、集客や普及などの活動にドライブがかかりやすい。	社員選手の場合、引退後のキャリアが保障される。

デメリット	自チームの価値が高まらなければ、厳しい運営を強いられる。	所属企業の経営状況に運営予算が左右される。
	リーグの制度や施策によって収益が左右される。	試合の集客に関係なく運営ができるので、人気を高めたり、集客を増やしたりするドライブがかからないことがある。

メリット・デメリットだけで見れば当たり前といえば当たり前なのだが、現状まだどちらが正しいのかリーグ自体に答えが出ていないがために、この2つのチームが存在していると言える。企業チームに関して言うと、企業側はローリスクローリターンであり、選手も収入面も引退後（バスケットでは平均40歳前後）も仕事が続けられるため安心である。しかし、これでは中学・高校のクラブ活動の延長線上に過ぎず、日本のトップリーグと呼ぶのには少し実力不足に感じる。とはいえ、観るスポーツとしてのバスケットには、まだブームがあるわけでもなく、ましてや野球やサッカーのように根強い人気幅があるわけでもないので完全にプロリーグになったとしても観客が埋まるとは想像し難い。なので、これから先数年間はまだ、プロと企業チームが2つのリーグで存在していることはやむを得ないのかもしれない。1発のブームを起こそうと考えずにじっくり企業側と折り合いをつけてからプロ化に向かって欲しいというのが私の1観客目線としての意見でもある。

そして研究の目的としては、2つのリーグをめぐったプロ抗争を解決出来るような理想のリーグを設立することである。

6. 成功事例研究

成功事例研究としてアメリカNBAよりロサンゼルス・レイカーズとbjリーグより大阪エヴェッサを取り上げ、この2つのチームをそれぞれ比較し、日本のチームへの課題や参考モデルになればよいと考えている。ロサンゼルス・レイカーズは長いNBAの歴史の中でチームの色を変え、各時代で強豪としてプレーオフ進出、優勝を果たしており、スーパースターも多い。

対する大阪エヴェッサはbjリーグ開幕から3シーズン連続優勝を果たしているため、成功事例として取り上げた。だが、近年は低迷気味に見える。低迷をしないためにチームの再建を図って欲しい。

■ロサンゼルス・レイカーズ

1946年～1949年のNBL時代に1回、1949年から現在2014年までのNBAの歴史において16回の優勝（うち2連覇3回、3連覇2回含む）、プレーオフファイナル進出31回、地区優勝32回という華々しい成績を持った歴史ある強豪チームである。優勝がない時代（10年区切りで見ても）はボストンセルティックスの8連覇があった1960年代と神様マイケル・ジョーダン擁するシカゴ・ブルズの2度のスリーピート（3連覇）があった1990年代だけである。この2つの時代でも優勝こそなかったが、スーパースター選手は存在していた。50～60年代にはNBAの歴史で1試合100点という最高得点記録を叩き出したウィルト・チェンバレン、1979年にルーキーながらチームを優勝に導き、自身もファイナルMVPを獲得した脅威の新人マジック・ジョンソン、80年代にはマジックとともに一時代を築いたカリーム・アブドゥル＝ジャバーなど有名なレジェンドスターが数多くいた。

マジックの引退以降低迷していたレイカーズは1995年にルーキー・オブ・ザ・イヤー（新人賞）獲得し、また、ルーキーシーズンに2度のリング破壊経験を持つ怪物、ジャキール・オニールを獲得する。さらに、ドラフトで後の2000年代のスーパースター、コービー・ブライアントを獲得。チームは1999年にマイケル・ジョーダン率いるシカゴ・ブルズのスリーピート時代を牽引した名将フィル・ジャクソンをヘッドコーチに迎え、2000年、2001年、2002年と3連覇を果たし、再び黄金時代を築く。しかし2003年、サンアントニオ・スパーズに敗北し4連覇を逃し、2004年、カール・マローン、ゲイリー・ペイトンという2人の大物ベテラン選手を加え「史上最強のチーム」と呼ばれたが今度はデトロイト・ピストンズに優勝を阻まれる。このシーズン後、オニールはトレードで移籍、フィル・ジャクソンヘッドコーチもチームを去る。2年後、フィル・ジャクソンヘッドコーチはチームに復帰するがここから数年間の低迷が始まる。この低迷期間はコービーのワンマンチームとなっていた。が、またレイカーズはプレーオフに帰ってきたのだ。新人王獲得経験があり、スペイン代表選手でもある大型センタープレーヤー、

パウ・ガソルの補強に成功し、さらに、コービーとともにチーム加入し黄金時代を築いたデレック・フィッシャーが古巣に復帰したのだ。そして2008-09シーズン、2009-10シーズンと2連覇を果たす。そして翌シーズン3連覇をプレーオフ初戦敗退で逃し、チームは迷走期を迎える。フィル・ジャクソンヘッドコーチが引退し、2005年の加入から往年のスーパースター、カリム・アブドゥル＝ジャバーから専属指導を受けていたアンドリュー・バイナムをトレードで放出する。これ以降あの手この手を尽くすが未だレイカーズは低迷気味であり、人気面、実力面（スタッツ、チーム成績）でもコービーはNBA No.1プレイヤーの座をレブロン・ジェームズに奪われている。レイカーズは今、またチームの再建を強いられているのかもしれない。

簡単に、レイカーズの歴史について述べて来たが、なぜ様々な時代で強豪であり、何度も優勝出来たのか。スーパースターの存在は大きいのかもかもしれないが、そういった選手を見つけてくるスカウトや、そういった選手に育て上げる練習メニューなど球団の環境がよいのではないかと考えられる。それもNBAの歴史60年以上に渡り受け継がれている。

■大阪エヴェッサ

対するはbjリーグより大阪エヴェッサについて。実は私自身bjリーグについてはNBAほど詳しくないため、大阪エヴェッサを取り上げたのもリーグ開幕から3連覇を成し遂げているから、という安直な理由である。とはいえ、スポーツバラエティ特番でのTV出演などもあるので知名度としてはbjでは一番だと言える。簡単にチームの歴史について考察しよう。bjリーグ初年度の2005-06シーズンは、ガードのマット・ロティック、フォワードのリン・ワシントン、センターのジェフ・ニュートンらを中心に手堅いオフェンス・ディフェンスを展開し、平均得点と得失点差でリーグ首位に立った。レギュラーシーズン31勝9敗で勝率トップとなる。翌2006-07シーズン、レギュラーシーズンは一時期5連敗を喫するなど苦戦を強いられたが、田村大輔の復帰後は、徐々に勝ち星を重ね、29勝11敗で、1位でプレーオフ進出を決める。プレーオフでは準決勝で大分に69-63で勝利。決勝では高松を94-78で勝利を収め、2シーズン連続で完全優勝を果たす。MVPにはデイビッド・パルマーが選出された。

2007-08シーズン、前シーズンMVPのデイビッド・パルマー

が退団し、シーズン序盤にリン・ワシントンを怪我で欠き苦戦が予想されたが、波多野和也の成長や大分から新加入したマイキー・マーシャルが2試合連続でトリプル・ダブルを記録するなどの活躍で西地区を引っ張り、西地区1位でプレーオフに進出する。プレーオフも勝ち上がり3連覇を達成した。MVPにはリン・ワシントンが選出された。

以上がリーグ開幕からの3連覇の歴史だ。しかし、出てくる選手名の半分以上は外国人選手である。日本人選手の名前も見受けられるが、肝心のMVPは全て外国人選手が受賞している。リーグが開幕したばかりで他のチームがしっかり体制を整える前にうまく力のある選手を揃えてきたという面で考えると優秀だが、これでは「NBAに入れなかったアメリカ人の再就職先」と言われても否定できないのではないだろうか。それ以降リーグでの順位が下降していつているのを、他のチームが成長し、また自分たちのチームが助っ人外国人のサラリーに耐え切れなくなった、と捉えてしまうと非常に皮肉である。批判するつもりはないのだが、JBLとの相違点でもある外国人選手の登録人数制限の関係がその裏づけになる。その点については次の章で考察していく。

とはいえ、大阪エヴェッサにはホームコートが10箇所以上あり、藤井隆さん歌唱のブースターソングや、松本人志の兄松本隆博さん作詞・作曲・歌による公式ブースターソングなどが試合前に本人登場で披露されたり、吉本興業と提携を結んでいたりサポートは豊富である。ホームコートが大阪、神戸にあるため観客は集まりやすい場所ではあるはずなので、後はいかに人気や話題性を付加価値として付けられるかにある。

■田臥勇太とNBA

続いて、現在はリンク栃木ブレックスに所属する田臥勇太選手について。この名前はそれなりに有名ではないだろうか。日本人初にして未だ唯一のアメリカNBAでのプレー経験を持つ選手である。田臥選手を取り上げたのは、NBAでのプレー経験を持つことだけでなく、NBAという「プロ」のリーグでプレーした選手が現在は企業チームでプレーし、国は違うが、日本にある2つのタイプのリーグ経験があるため、JBLとbjリーグをつなぐ架け橋になればいいなという願望からだ。

2003年5月、トヨタ自動車アルバルクを退団し、同年7

月、NBA ダラス・マーベリックスのサマーリーグに参加した。同年9月、NBAのデンバー・ナゲッツと契約し、プレシーズン戦3試合に出場したが開幕ロースターには残れず解雇された。ナゲッツのチームメイトには田臥よりも身長が低い165cmのアール・ボイクンスがいたが、ポジションを奪うことはできなかった。同年11月、ABA（アメリカ・独立プロリーグ）のロングビーチ・ジャム・アルビレックスと契約した。ロングビーチ・ジャムではデニス・ロッドマンとも一緒にプレーした。2004年4月、ロングビーチ・ジャムで優勝を果たす。

2004年9月6日、NBA フェニックス・サンズと契約した。同年11月1日、フェニックス・サンズの開幕メンバーに登録され、日本人として初めてのNBAプレーヤーとなった（なお、日系人としては、それ以前にワッツ・ミサカこと三阪互という日系アメリカ人選手がいた）。その後、開幕戦を含む4試合に出場した（プレー時間は合計17分、7得点3アシストであった）が、同年12月18日に解雇された。サンズでは後にシーズンMVP、アシスト王になるスティーブ・ナッシュの指導も受けた。同月、ABAのロングビーチ・ジャムと再契約し、NBAへの復帰を目指した。

2005年9月、NBA ロサンゼルス・クリッパーズと契約し、プレシーズン戦7試合に出場したがシーズン開幕前の10月31日に経験不足を理由に解雇された。同年11月3日にNBA傘下のNBA デベロップメント・リーグに9巡目70位でドラフト指名され、アルバカーキ・サンダーバーズに入団した。チームの主要選手として活躍したが、シーズン後半に怪我で戦線離脱した。

2006年7月、NBA ダラス・マーベリックスのサマーリーグに参加した。同年11月にNBA デベロップメントリーグのペーカーズフィールド・ジャムに3巡目11位指名を受けて入団した。ジャムの前身はABAのロングビーチ・ジャムであるため、2年ぶりの古巣復帰ともいえる。2007年11月にジャムのロースターから外れ、同リーグのアナハイム・アーセナルへ移籍した。

2008年7月、NBA ニュージャージー・ネッツのサマーリーグに参加した。約5年間、田臥選手はNBAに挑戦し続けた後、2008年の夏頃に田臥選手の高校時代の指導者が率いるJBLのリンク栃木ブレックスに入団する。

2008-09年レギュラーシーズンでは、アシスト王・スティール王の2冠に輝き、レギュラーシーズンのベスト5に選出された。しかしチームは5位に終わり、プレーオフに進出できなかった。2009年6月、NBAに再挑戦する意向を表明し、NBA ダラス・マーベリックスから招待されたミニキャンプに臨んだが、直前の練習で右かかとを打撲し練習に参加できなかった。同年7月、2009-10年シーズンはNBAを断念し、引き続きリンク栃木でプレーすると発表した。

2009-10年レギュラーシーズンでは、右かかとの怪我のために開幕から1か月以上欠場した。2009年11月28日に復帰後、レギュラーシーズンを2位で終え、チームをJBL昇格後初のプレーオフに導く。2010年4月のJBLファイナルで、それまで2連覇していたアイシンシーホースを3連勝で破り、初優勝（JBL）を果たした。田臥はチームの中心選手として活躍し、プレーオフのMVPに選出された。また、年間ベスト5賞に選出された。2010年4月、リンク栃木と来季2010-11年シーズンの契約延長に合意したと発表した。同月17日、リンク栃木の本拠地・宇都宮市での優勝パレードに参加、沿道には約1万人の市民が駆けつけた。同年7月、12年ぶりにバスケットボール男子日本代表の試合に出場した。2010年11月、日本代表として初めて主要国際大会である2010年アジア競技大会（中国・広州）に出場、1994年アジア競技大会（広島市）以来16年ぶりのベスト4入りに貢献した。準決勝で韓国に敗れ、3位決定戦ではイランに敗れたためメダル獲得はならなかった。開催地が中国であることから各試合で激しいブーイングを受けたが、「国内ではできない経験をさせてもらっている」「相当嫌われているんだと思うけど、見てろよ、とモチベーションになる」と感想を述べた。2010-11年レギュラーシーズンでは、チームはプレーオフ圏外の6位で終わったが、東日本大震災の影響で3月11日以降の公式試合日程が中止となり、プレーオフ自体が開催されなかった。個人成績では前年よりも落ち、平均アシスト数はリーグ6位の3.35であった。しかし、ターンオーバー数は年々改善し、アシストをターンオーバーで割った数値（A/T）が前年の2.4を上回る3.5であり、安定したプレーをしていたといえる。

といった具合に日本での田臥選手はスーパースターのような輝きを持っている。田臥選手のような選手が日本人選手で数人現れれば、日本のプロも活性化すると私は考えている。

その候補の1人として、2006年、日本で開催されたバスケットボール世界選手権で一躍注目を浴びた五十嵐圭選手が挙げられる。スピードと鋭いドライブが持ち味で、180cmとバスケット選手としては小柄だが、日本人としては高身長で2枚目なのでメディアからも注目を浴び、バラエティを中心に少々のTV出演や写真集の出版もあった。バスケットとは直接関係ないかもしれないが、五十嵐選手のようにメディアから世間に知ってもらうことで人気を集め、少しでもバスケットというスポーツを知ってもらえればリーグの発展にもつながる。2006年の世界選手権は1試合目が地上波放送されていたのにも関わらず、2試合目からは深夜帯に再放送、3試合目からはBS放送、といったように、バスケットボールの試合は視聴率に悩まされている。まずは観てもらおうことが大切なので、現在BSではNBAしか放送されていないが、少しずつ日本のリーグも放送出来るように、五十嵐選手のような2枚目だったり、お笑い芸人のような選手だったり、とにかくスター性のある選手が必要だ。もちろんバスケットの技術は大前提として必要だが。

7. bjリーグとNBA

バスケットボールは基本的なルールは共通だが、小学生のミニバス、中学・高校、大学、社会人、プロ・アマなど様々な環境があるため、それに合わせて少しずつ異なったルールが存在している。例えば、日本での基本的な試合時間は1試合前半後半それぞれ20分の計40分なのに対し、アメリカNBAの試合時間は前半後半それぞれ24分ずつで計48分ある。

といったように、各環境の選手がプレーしやすいようにルールを変えている部分がある。基本的なルールはFIBAのルールに基づくのだが、その中でもNBAは独特のルールが数多く存在しており、その1つが先ほどの試合時間である。その他にも、バスケットはファールを犯していいのは5回までなのだが、NBAだけが6つまで許されることになっている。おそらく試合時間が合計8分長いことと、よりタフなプレーが起きることが想定されているためである。その他にも数多くNBAの独自のルールが存在しているのだが専門的な内容になるので割愛させていただく。

本題は、日本のプロ、bjリーグが、NBAの独自性のあるルールを数多く適用・準用していることについてだ。適用させ

ている目的がNBAに対抗することならば文句は何ひとつない。しかしそんなつもりがないことはここ10年程における日本バスケット界の動きを見ていればわかる。では、私なりに適用させることのメリット・デメリットを挙げる。メリットは先ほど述べたNBAを意識できる点の他に、NBAを見慣れていてそれまで日本のバスケットは窮屈だ、と日本に興味のなかったファンが、同じルールなら見てやろうじゃないか、となる可能性がある点である。が、リーグが開幕して9年、そうっていないことがデメリットでもある。なぜ、デメリットなのか。ずばり真似事にしか見えない、つまり劣化でしかなくオリジナリティが創出出来ていないからだ。この2点はファン視線なので重要ではないが、重要なのはこれだ。世界大会に出場する際について。世界大会とNBAではかなりルールが違っていると言っても過言ではないのだ。NBAの選手は技術やズバ抜けた身体能力で数多く優勝してきているが、bjリーグの選手が世界大会に出場するときに果たして、同じように行くのだろうか。国際ルールにアジャストするだけでも大変だが、間違った認識をしていると試合以前の問題になる。だが、そうは言っても実際問題、細かいルールのことなので試合に影響が出てくるとは考えづらいが、いずれにせよリーグを統合するという点では大きな弊害になることは間違いない。

8. 新たな日本プロリーグの設立

以上のことを踏まえ、私が考える新日本プロバスケットボールリーグの構想について述べていきたい。

基本的なモデルは、JBL側のリーグで、チーム自体は全て混ぜてもいいが、「面白み」という意味で、全選手で総ドラフトをすることを提案したい。ルーキードラフトはやはり新たな人材発掘は重要なので、高校卒業、大学生、社会人問わず、実力があれば“来る者拒まず”の姿勢でいくこととする。現在の日本のリーグでもかなり問題視されている外国人選手の登録について。私の意見としては、外国人選手は登録可能だが、そのかわり、スタメン（スターティングメンバー）は全員日本国籍を持つ選手でなければならない、とする。試合の細かなルールについては国際試合を意識して全てFIBAのルールを採用させるべきだ。リーグの運営に関してはやはりスポンサーとしてある程度日本の企業からの出資も必要になるが、それだけでは足りないので、バスケットに力

を入れている私立の高校や大学の支援も受ける。その代償として、選手との交流試合や指導もすること。そうすれば次の世代の若手の人材育成にもつながるのではないだろうかと思はれる。そして、欠かせないのは地域との連携だ。特に地方のチームに力を入れて欲しいことになるが、屋外のコート設置である。日本には体育館や学校以外でバスケットを出来るところがほとんどない。その影響もマイナーの要因かもしれない。ただ、単に屋外にコートを設置するだけではボランティアなので、使用料こそ取らないが、周辺の設備を充実させるなどして、そこから利益を得ればよい。

リーグの発展だけでなく、日本バスケットボール界の明るい未来を願いも込めた、私の新日本プロバスケットボールリーグの構想論である。

9. 結論

最後に、私の出した答えとしては、いずれ1つのリーグに統合すべきだが、今はまだそのときではない、ということ。それは、今1つになったとしても話題性に欠け、また、選手の移動や企業とチーム、協会との問題が解決できていないからだ。では、いつ統合すべきかを今後の課題とともに考察する。

今後の課題としては、まずは企業側との対峙だ。だが、さらに大変なのは日本代表の躍進である。2020年の東京オリンピックに出場することを目標にして欲しい。リーグの統合はそれからでも遅くはない。予選は突破出来る可能性が十分にあった2006年の世界選手権の失敗はして欲しくないのが1ファンの意見だ。日本開催のオリンピックで成果を残せれば両リーグの未来は明るくなり、また、経済効果もかなり大きいので、支援してくれる企業も増えてくるはずだ。そうなれば統合した1つの完全プロリーグも不可能ではない現実となる。なので、今後の課題は2020年の東京オリンピックだ、がんばれ日本。

◎主要参考文献

著書

- 1 武藤泰明 『プロスポーツクラブのマネジメント』 東洋経済新報社、2006年6月8日。
- 2 河内敏光 『意地を通せば夢は叶う！ :bjリーグの奇跡』 東洋経済新報社、2005年。

論文

- 1 磯谷美穂 「bjリーグのボランティアの活動継続意欲に関する研究」 2008年度。
- 2 山崎大輔 「NBAの発展からみるスポーツマーケティング」 2000年度。

Web資料

- 1 <http://nipponbasketball.seesaa.net/category/8269856-1.html> 閲覧日(2012.11/11 2:43)。
- 2 wikipedia. (日本プロバスケットボールリーグ) , 2013.10/01。
- 3 <http://tabidori.shiga-saku.net/e920539.html> , 2013.10/01 14:10。
- 4 http://www.gyakubiki.net/g/REQID_RDKW.htm?&_THEME_CD=1200&_KEYWORD_CD=1210 , 2013.10/01 14:20。
- 5 <http://number.bunshun.jp/articles/-/701447> , 2013.12/01 16:58。
- 6 http://sportiva.shueisha.co.jp/clm/otherballgame/2012/10/04/192013nblnational_basketball_leaguenbl_jbljblbj_2008fibajblbj_199320/ , 2013.12/04 18:38。
- 7 <http://basketballnavi.com/t20w/tag/bj%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%82%B0/> , 2013.12/16 0:26。
- 8 <http://www.plus-blog.sportsnavi.com/umekichihouse/article/20> , 2013.12/17 0:41。
- 9 <http://www.linktochigibrex.com/team/recruit/> 2014.2/01 22:31